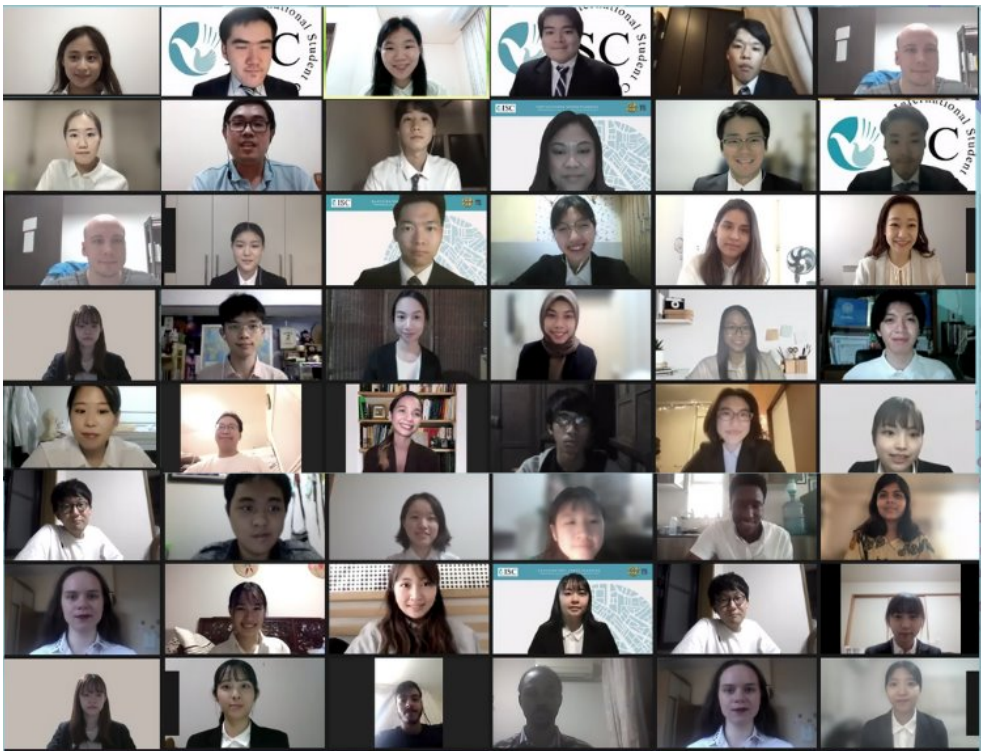


第67回国際学生会議

The 67th International Student Conference

事業報告書

総合テーマ

New Normal: Unity without Boundaries

ニューノーマル：国境を越えた団結へ

ISC
International Student Conference

目次

序章		2
	代表挨拶	3
	団体理念	4
	団体沿革	5
	実行委員名簿	6
	総合テーマ	8
第1章	**事前活動**	9
	完全自律型兵器に関するグローバルユース会議	10
	事前招集会	12
	・事前招集会開催概要・日程概要	12
	・学術交流総括	15
	・参加者交流総括	16
第2章	**本会議**	17
	会議概要	18
	・会議日程概要	20
	・最終成果物の提出	21
	・参加者名簿	22
	本会議の活動報告	25
	・全体総括	25
	・分科会総括	26
	・分科会テーマ説明	29
	・中間報告会	44
	・成果発表会	46
	・各種交流総括	49
	・月例交流企画	50
	・部活動紹介	52
終章		53
	謝辞	54

序章

代表挨拶
団体理念
団体沿革
実行委員名簿
総合テーマ

代表挨拶

国際学生会議（ISC）とは、1954年に第1回を開催して以来、毎年夏の2週間、世界各地の学生を日本に招き、寝食を共にしながら学術・文化交流を行う学生団体です。

私自身は、本年度で国際学生会議に初めて参加してから4年目を迎えます。海外参加者として初めて参加した第64回国際学生会議では、多様な経験を持つ学生と議論や交流をすることによって、国際社会が直面している課題に対して真剣に考えることで、自分の視野を広げることができ、かけがえのない経験をさせていただきました。昨年度の第66回国際学生会議に私が実行委員として活動していた当時、新型コロナウイルス感染症の拡大により、各種活動をオンラインにて進めざるを得なくなり、大変残念に思いました。しかし、対面での交流が難しい状況の中、様々な企画を通して国境を越えた絆を結ぶことができることこそ、国際学生会議の大きな魅力だと改めて実感しました。

本年度の活動も、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、昨年度に引き続きオンライン形式にて開催せざるを得なくなりました。世界的に困難な状況を認識した上で、世界中の若者と団結して、コロナ禍に相応しいプラットフォームを創るべく、第67回目を迎える本年度の会議は「ニューノーマル：国境を越えた団結へ」を総合テーマとして掲げました。オンライン形式にて活動を進めるにあたって、課題点は多々あったものの、多くの方々のご協力とご支援のおかげで、国際学生会議の精神や伝統を継承することや、国際社会が抱えている課題に対して新たなアイデアを生み出すことができたのではないかと思います。初の試みとなる全面オンライン開催でしたが、世界各地から参加した学生たちが各種交流企画を通じて親睦を深めることができたことに、実行委員一同大変嬉しく思います。

参加者の皆さんには、本会議および成果発表会が終わった後も、国際学生会議の精神の灯を絶やさぬよう、この夏の経験を次世代の若者にも伝えてくれることを願っています。皆さんの今後のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

第67回国際学生会議は、政府機関、民間企業、法人財団をはじめ、多くの方々の多大なるお力添えにより実現できました。この場をお借りしまして、弊団体の事業にご支援いただいた皆さまに、深く御礼申し上げます。次年度の開催形式は今後の状況によって検討されますが、今後ともISCの活動を温かく見守っていただけましたら幸いです。末筆ながら、新型コロナウイルス感染症の拡大が収まり、一日も早く穏やかな日々が戻りますように、皆さまのご健康を心よりお祈り申し上げます。

第67回国際学生会議 代表
カンロンタム・ダムロンスントーンシャイ（ミン）

団体理念

国際学生会議の理念として、大きく分けて世界平和への貢献、学生の主体性の養成、多様性の尊重、社会への貢献の4点が挙げられます。

当団体の最大の目的は国際社会の繁栄と秩序の安定に寄与し、最終的に世界平和に貢献することです。平和は国際社会が長年追い求めてきた目標であり、社会の一員である個人が目標達成に向けて努力することが求められています。しかし、平和といっても一概に定義することは容易ではなく、紛争や対立がない世界を実現するだけでは十分とは言えません。そこで私たちは、近年注目されている「人間の安全保障」という概念を重要視し、誰一人取り残されない社会こそが目指すべき世界平和であると考えます。そして、学生である我々が当事者意識を持ち、如何にして世界平和実現のために行動を起こしていくべきかを熟考します。

学生自身が主体的に物事を考え、行動に移す力を養うことは非常に大切です。自分たちの可能性に気付き、自分の身の回りや世界で起こっている問題に目を向けることで問題意識を高めることができ、創造的な発想や批判的思考力を身につけることができます。当団体の取り組みの中でも、参加者が自主的な判断ができる機会を提供し、一人一人が主体性を養うことを促しています。感受性が豊かな学生という時期に培った自信と経験は、将来に繋がる大きな糧となることを信じています。

さらに、今日の国際的な環境において、「多様性」という要素は重要な概念です。世界中の多種多様な人々の交流において個性や経験を尊重することは不可欠であり、多様性が受け入れられる社会の実現に尽力することは当団体の大きな使命の一つです。また、異なる文化や環境の中で生まれ育ち、多様な価値観を持つ学生たちは、参加者の知見と会議の議論の幅を広げる非常に意義深い存在です。会議期間中の密度の濃い交流が、より実りの多い学術的成果を生み出すはずです。

忘れてはならないのが、一般社会において学生の影響力はそこまで大きくないとはいえ、学生も社会の中で重要な存在であり、積極的な社会参加と社会貢献が求められているということです。学生の提言は実装に繋がるものではないかもしれません。しかし、我々は社会的要因や国益等のしがらみに縛られない学生ならではの革新的な意見を大切にし、実際の会議の成果を様々な形で社会に発信していきます。さらに、会議終了後にも会議で培った問題意識や探究心を継続させ、参加者自身がそれぞれの形で社会の原動力となっていくという自覚と責任を持つように呼びかけています。

団体沿革

1934年　第1回日米学生会議（国際学生会議の母体）
「世界の平和は太平洋の平和、太平洋の平和は日米間にあり、然してこの現実には若き日米学生の間においての率直な意見の交換、及び相互。理解の信頼を促進しなければならない」という提唱文の下、青山学院大学にて開催。

1941年　日米開戦により会議は開催されず。

1954年　第1回国際学生会議
12カ国から84名の外国人が参加。
28日間にわたり、東京、関西、北海道、仙台で開催。

1962年　第9回国際学生会議
団体代表者会議を新たに設置。以後の会議の充実を指す。

1968年　学生運動の影響により、日本国際学生協会の中央委員会が分裂。

1970年　第16回国際学生会議
国際学生会議の再開。

1990年　第37回国際学生会議
北海道帯広市との協力により、市民の方との国際交流の体験を共にする。

2003年　SARSの大流行により、国際学生会議は開催されず。

2018年　第64回国際学生会議
史上最多23カ国から学生が参加。

2020年　第66回国際学生会議
新型コロナウイルス感染症の影響により、本会議は中止。
本会議の代わりに、オンラインイベントを計6回、全面オンラインにて開催。
キラーロボット反対キャンペーンの公式メンバーとして認定。
日本国際学生協会の共同団体に移行。

2021年　第67回国際学生会議
新型コロナウイルス感染症の影響により、本会議を全面オンラインにて開催。
初の外国籍の実行委員長を迎える。
およそ半分の実行委員が海外に滞在中でありながら、運営業務に務める。

第67回国際学生会議実行委員会名簿

代表	Kanlongtham Damrongsoontornchai （カンロンタム・ダムロンスントーンシャイ） 早稲田大学　大学院アジア太平洋研究科　修士1年
副代表 兼 財務	青柳識（あおやぎしき） 慶應義塾大学　経済学部経済学科　3年
副代表	小松正実（こまつまさみ） 創価大学　法学部法律学科　4年
学術	Mai Lan Tran（マイ・ラン・チャン） Academy of Journalism and Communication, Faculty of International Affairs 2年
学術	土橋美燈里（どばしみどり） シェフィールド大学　大学院都市計画学部　修士課程
総務	Dao Duy Doan（ダォ・ドゥイ・ドァン） 立命館アジア太平洋大学　アジア太平洋学部　4年
総務	滝川伸作（たきかわしんさく） アメリカ創価大学　リベラルアーツ学部　3年
総務	小澤夏菜（おざわかな） 上智大学　法学部国際関係法学科　3年
渉外	田村奈央（たむらなお） 東京都立大学　人文社会学部人文学科　3年
渉外	有賀由佳（ありがゆか） 明治学院大学　経済学部国際経営学科　4年
広報	Minhwa Jeong（鄭 民和／ジョンミンワ） 早稲田大学　国際教養学部国際教養学科　2年
広報	西村颯馬（にしむらそうま） 法政大学　グローバル教養学部　4年
企画	金高哲大（かねたかよしひろ） 早稲田大学　国際教養学部国際教養学科　2年
企画	Silmi Nur Az Zahra（シルミ・ヌル・アザ・ザハラ） 立命館アジア太平洋大学　国際経営学部　4年

テーブルチーフ1　青柳沙来（あおやぎさら）
早稲田大学　国際教養学部国際教養学科　4年

テーブルチーフ2　滝川伸作（たきかわしんさく）
アメリカ創価大学　リベラルアーツ学部　3年

テーブルチーフ3　川口実のり（かわぐちみのり）
アムステルダム大学
Politics, Psychology, Law and Economics (PPLE)　2年

テーブルチーフ4　高木萌々佳（たかぎももか）
名古屋市立大学　人文社会学部国際文化学科　3年

テーブルチーフ5　Patricia Anne Calma（パトリシア・アン・カルマ）
SP Jain School of Global Management Business Administration 3年

総合テーマ

New Normal: Unity without Boundaries
ニューノーマル：国境を越えた団結へ

世界各国で今なお猛威を振るう新型コロナウイルス感染症により、私たちは行動の制限を余儀なくされました。これによりオンライン環境の改善が進む一方、これまで当たり前だった生活が脅かされ、世界の展望はより不確実なものとなっていきました。こうした状況のなか私たちに求められるのは、感染症後の「ニューノーマル」への適応、つまりその場しのぎの小さな変革だけでなく、将来の世代を見据えた地球規模での変革であると考えます。その変革の大きな障害となっているのが、人間を取り巻く「境界」であると考えています。これは国境という政治的、物理的な区別だけでなく、人種や宗教、学問やといった自身の生き方の根底に関わる価値観を指します。新型コロナウイルス感染症は国や地域を跨ぐ機会を減らしただけでなく、個人の価値観を再構築し揺るぎないものを成長させたと強く感じています。今こそ、内に秘めた思いを世界中の人に交わすことで更なる成長を促すときです。第67回国際学生会議は、コロナ禍という過酷な状況下に相応しい交流の場を創ることで、こうした「国境」を乗り越え、私たちが「ニューノーマル」のあるべき姿を定義していくことを宣言します。

The current situation of the pandemic has changed the way we live profoundly. As the pandemic continues, we are urged to adapt to our “New Normal” which is not only a short-term change but a life-long change occurring on a global scale. We, the 67th International Student Conference (ISC67), are aware of the hardships that the world is facing, and we are determined to unite youths from all around the globe to cooperate and make a positive impact on our society. We aspire to turn this crisis into an opportunity for us to come together regardless of such obstacles. It has always been the mission of our conference to bring youths around the world to engage in discussions and seek potential solutions for various global issues. We believe that only when we unite and confront the challenges together as one do we come out of them stronger than before. We have initiated to thrive over those boundaries by making this platform possible during such a difficult time. On this timely occasion, we call for our peers who are the future of the world to be part of our intercultural dialogue that aims to bring creative innovations to society and foster unity that transcends our national borders. “New Normal” is not a term that defines us. We are the ones who define what “New Normal” is and ought to be. No matter what boundaries tear us apart, we believe that we can still unite and thrive in this age of “New Normal”.

第1章　事前活動

完全自律型兵器に関するグローバルユース会議
事前招集会
事前招集会開催概要・日程概要
学術交流総括
参加者交流総括

完全自律型兵器に関するグローバルユース会議

文責　カンロンタム・ダムロンスントーンシャイ

国際学生会議は、2020年8月に完全自律型兵器（キラーロボット）を未然に禁止するために国際規模で活動する非政府組織（NGO）の連合体である「キラーロボット反対キャンペーン」（英: Campaign to Stop Killer Robots）の公式メンバーとして認定されました。2012年10月に結成されたこのキャンペーンは、武力行使における人間の制御を守ることを目的としており、完全自律型兵器を廃止するよう世界各国の政府に働きかけています。世界規模で様々なユース団体が参加している中、日本からは国際学生会議の他、難民を助ける会やヒューマン・ライツ・ウォッチなどが、日本における活動を牽引しています。

当団体がキャンペーンの公式メンバーとして認定されたことを契機とし、国際学生会議は「キラーロボット反対キャンペーン」と共同で、2020年12月12日（18:30～21:30）にオンライン形式にて「完全自律型兵器に関するグローバルユース会議」（英：Global Youth Conference on Fully Autonomous Weapons）を開催しました。当イベントは、参加者が完全自律型兵器と世界の平和や安全がどのように関係しているかを学ぶ機会を提供することを目標の一つとして掲げました。当イベントには、20カ国からのユース（青少年）代表者が集まり、日本政府や国連の関係者に向けて、完全自律型兵器に関する自国の立場や禁止を支持する理由についてスピーチを行いました。また、ゲストスピーカーとして、国連軍縮部のキム・スー・ヒュン氏、脳科学者の茂木健一郎氏、国際人権NGOヒューマン・ライツ・ウォッチ日本代表の土井香苗氏をはじめ、各分野における関係者・専門家をお招きし、「軍縮への若者参加の重要性」や「科学的な観点から完全自律型兵器の危険性」などについてお話しいただきました。

また、イベント終了後の2021年1月7日には国際学生会議実行委員4名と当イベントで日本を代表したユーススピーカーの田辺アリン・ソヴグラン氏で日本の外務省を訪問し、完全自律型兵器問題を管轄する官僚と面会する機会をいただき、当イベントの最終成果物である政策提言を提出させていただきました。なお、当イベントは下記の通り、様々な媒体で紹介されました。

- 2021年3月18日：国連軍縮部のユースサイトに、イベントの様子を英語でまとめた記事（著：田辺アリン・ソヴグラン氏）が投稿されました。
  - リンク：https://www.youth4disarmament.org/spotlight/keeping-youth-loop-killer-robots
- 2021年3月20日：「Yahoo! ニュース」の「完全自律型兵器のグローバルユース会議①『人間の責任を確実にするため若者は重要な役割を担っています』」（著：佐藤仁氏）というニュース記事にて、代表者各位のスピーチが紹介されました。
  - リンク：https://news.yahoo.co.jp/byline/satohitoshi/20210320-00228387
- 2021年7月11日：NHKスペシャル「2030未来への分岐点」という番組にて、当イベントとその後の外務省訪問の模様が放映されました。
  - リンク：https://www.nhk-ondemand.jp/goods/G2021114604SA000/

「会議に参加したユース・スピーカーの声は、露のように小さいかもしれない。しかし、露が集まれば河となり、やがては大海となるように、一人の若者の声は、より良い世界に向けた大きなうねりの第一歩なのである。だからこそ、どんなにその声が小さく見えようとも、私たち若者の声が持つ無限の可能性を決して侮ってはいけない。」

— 田辺アリン・ソヴグラン氏（日本ユース代表）

「キラーロボット反対キャンペーン」（英: Campaign to Stop Killer Robots）の公式ロゴ

各国のユース代表者の一部

日本ユース代表の田辺アリン・ソヴグラン氏と第66回・第67回国際学生会議実行員

2021年1月7日の外務省訪問の様子

事前招集会開催概要

文責　青柳識

2021年5月15日から5月16日にかけての2日間、国内外の参加者に向けた事前招集会を、オンラインにて開催しました。本年度の事前招集会は、参加者同士の親睦を深めることを目的として実施されました。

当初は日本在住参加者向けは対面にて、海外在住参加者向けはオンラインにて一部参加する形式を計画していました。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大および政府による緊急事態宣言の発令が続いたことにより、全面的なオンライン開催への変更を検討せざるを得なくなりました。世界各地の参加者にとって初めて顔合わせをする機会であったため、本会議までの流れや国際学生会議の理念の説明だけではなく、多様な交流企画を実施しました。

開催初日は、まず団体概要の説明と実行委員の紹介を行った後、各分科会で議論の方針決定や日程調整、アイスブレイクを行いました。さらに、分科会の枠を越えた交流企画を実施しました。開催最終日には任意の参加者を対象に、前半に英語力の向上を目的に、連想ゲームや簡単なディスカッションを行いました。また、後半に参加者間の緊張を緩めることを目的に、「マフィアゲーム」という交流企画を実施しました。

過去に前例のない、オンラインにての事前招集会の開催ではありましたが、全体の満足度に対する評価においても、参加者の方々から非常に高い評価（総計10点中9.6点）をいただくことができました。また、各コンテンツに対しても、最高評価の満足度を示していただいた参加者が6割強でした。「参加者同士の声を聞くことができて嬉しかった」や「分科会リーダーの周到な準備と寛容な態度に居心地の良さを感じた」という好評の声から、特に分科会の議論への満足度が非常に高かったことがわかりました。

本来であれば対面での開催を予定していた事前招集会が急遽オンライン形式での開催となり、課題は多くありましたが、参加者だけでなく、実行委員にとっても、大きな達成感が感じられたことから、成果発表会に向けた非常に大きな一歩を踏み出せたのではないかと感じています。また、国の垣根を超えて団結することができた瞬間でもあったため、実行委員並びに参加者のモチベーションを大いに上げる貴重な機会であったと考えます。

事前招集会日程概要

文責　青柳識

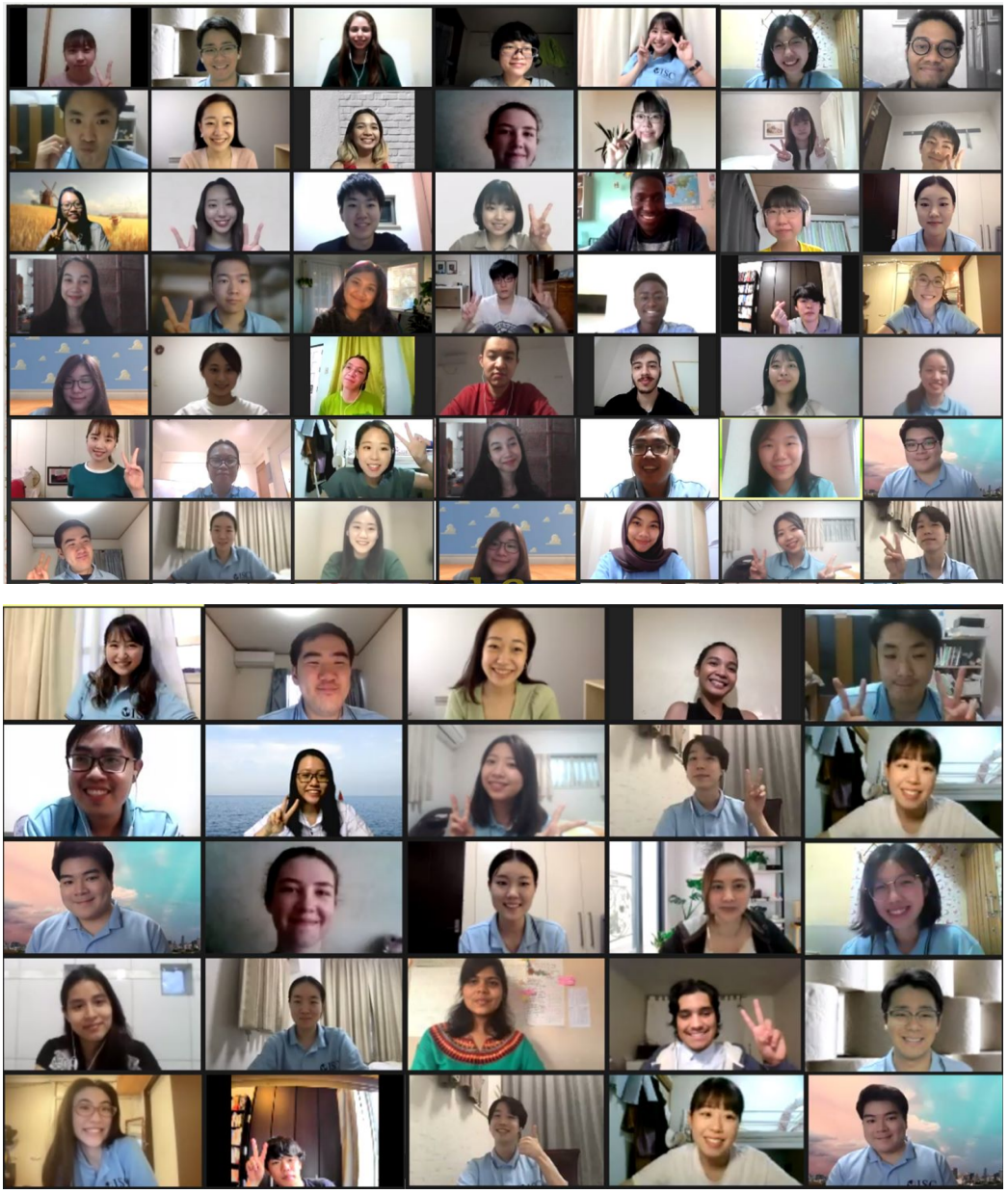
日時・場所　2021年 5月 15日（土） 18:00～21:00（日本時間）
2021年 5月 16日（日） 15:00～18:00（日本時間）
※Zoomを利用して、オンライン形式にて開催

活動内容　学術セミナー・分科会議論・参加者交流

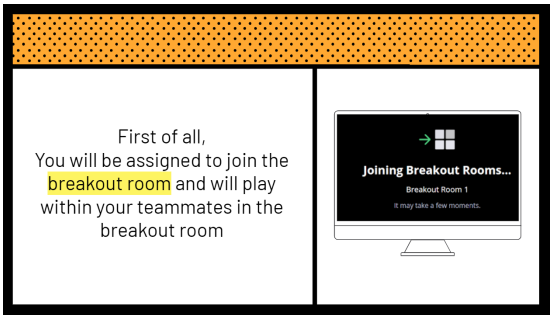
参加者人数

参加者	39名
実行委員	17名
計	56名

	時間 （日本時間）	プログラム内容
5月15日	18:00～18:30	集合・プログラムの説明 代表による開会宣言 団体概要・団体理念の紹介
	18:30～18:45	実行委員による自己紹介
	18:45～19:10	成果発表会までの流れの説明
	19:10～20:20	各分科会交流会
	20:20～20:50	参加者交流企画 ・「真実二つ、嘘一つ」ゲーム（Truth or Lie） ・ミッションゲーム（Mission Game）
	20:50～21:00	集合写真・解散
5月16日	15:00～15:10	集合・プログラムの説明
	15:10～17:00	学術交流企画 ・単語推測ゲーム（Taboo Game） ・ジェスチャーゲーム（Gesture Game） ・グループディスカッション（Group Discussion）
	17:00～17:55	参加者交流企画 ・マフィアゲーム（Mafia Game）
	17:55～18:00	振り返り・集合写真・解散



事前招集会の集合写真（上:1日目、下:2日目）



事前招集会で使用した資料（左:学術交流企画、右:参加者交流企画）

学術交流総括

文責　マイ・ラン・チャン
翻訳　カンロンタム・ダムロンスントーンシャイ

1日目

事前招集会初日は、約1時間にわたって各分科会交流会を実施しました。当交流会は、参加者各自が所属する分科会（通称：テーブル）を主導する「テーブルチーフ」、テーブルチーフをサポートする「サブテーブルチーフ」、そして分科会の参加者と顔を合わせる初めての機会でした。各テーブル専用のブレイクアウトルームが用意され、各ブレイクアウトルームには、テーブルチーフ、サブテーブルチーフ、テーブルメンバーが配置されました。この交流会では、全員が自己紹介をし、自分の仕事のスタイルや長所・短所について共有し合い、お互いをよりよく理解できるように話し合いました。テーブルチーフからは、各自のテーブルの目標と、問題が起きたときにサポートしてくれる対応者や体制などについて説明しました。その後、テーブルチーフが5月から8月までの計画を参加者に共有し、5月に予定された最初の勉強会に必要なタスクについて、説明や割り当てをしました。この交流会を通じて、各位が今後の研究活動や意見交換に本格的に取り組む前に、チームの絆を深めることができたのではないかと感じています。また、ゲームなどを導入した分科会も一部見られ、初対面の参加者同士の距離を縮めることができました。

2日目

事前招集会最終日には、4ヶ月間の本会議で各分科会の主軸となるグループディスカッションに慣れることを目的とした40分間のディスカッションセッションが実施されました。この活動の目的は、分科会の枠を越えて参加者同士がお互いに交流して意見を交換することだったため、実行委員は参加者が自信を持って自分の意見を発言できるような場づくりに全力を尽くしました。

まず、参加者は無作為に5つのブレイクアウトルームに分けられ、1つのブレイクアウトルームに約4～5名の参加者を割り当てました。各ブレイクアウトルームには、実行委員やテーブルチーフなど、少なくとも3名のモデレーターを配置しました。モデレーターは、議論を促進し、全員が自分の意見を発言できるように促す役割を担いました。この活動では、議論のテーマを2つ設定しました。第1に、「大学はオンラインで授業を実施する場合、授業料を下げるべきだ」というテーマ、第2に、「学校はコンピュータ上のソーシャルメディアサイトをブロックすべきだ」というテーマです。モデレーターも含めて、全員が積極的に意見を述べている様子がうかがえました。その後、全員がメインルームに戻り、各ブレイクアウトルームの議論の結果を共有しました。各班からは、1名が指名され、自分のブレイクアウトルームが与えられたテーマについて出した意見をまとめ、要点を全員の前で発表してもらいました。この活動を通して、参加者へ有意義な学びの場を提供するという目的を果たすことができたのではないかと感じています。

参加者交流総括

文責　金高哲大

1日目

第67回国際学生会議にとって初めての顔合わせの場であった事前招集会においては、参加者の交流を深めるために、英語を用いたレクリエーションを2つ実施しました。はじめに、参加者に英語を使用する環境に慣れてもらうこと、またゲームを通じて個人間の相互理解を深めることを目的に、アイスブレイクとして「真実二つ、嘘一つ（Truth or Lie）」というゲームを実施しました。このゲームでは、各自が二つの真実と一つの嘘を言い、他の参加者がそのうちどれが嘘なのかを当てようとします。次に、リモートでも参加者が体を動かすことができる「ミッションゲーム（Mission Game）」というアクティビティーを、5つの分科会の個別会議の後に実施しました。オンライン形式における初めての交流の機会であったため、企画の実施に多少の不安を抱えていましたが、参加者の高いモチベーションと積極性のおかげで、交流活動の主目的である「参加者・実行委員同士の仲を深める」という目標を達成することができました。

2日目

事前招集会最終日には、日本国内で有名な人狼ゲームの英語版である「マフィアゲーム（Mafia Game）」を複数に分かれたブレイクアウトルームにて、約1時間行いました。このゲームを進める上で、参加者は必然的に一定時間の議論しなければならないため、仲を深めることができ、これからの4ヶ月にわたる分科会での議論に向けた練習になるような場を作ることができました。参加者の方々からは、この2日間の交流に関して、「今後の分科会での活動のモチベーションになった」や、「とても楽しく、国内外の友達を作ることができた」など、高い評価をいただいた一方で、「もっと交流の時間が欲しかった」という声も上がったため、それらを参考にして、後の月例交流会の企画を考えていきました。

第2章　本会議

会議概要
会議日程概要
最終成果物の提出
参加者名簿
本会議の活動報告
全体総括
分科会総括
分科会テーマ説明
中間報告会
成果発表会
各種交流総括
月例交流企画
部活動紹介

会議概要

文責　青柳識

正式名表記　第67回国際学生会議

英語名表記　The 67th International Student Conference (ISC67)

会期・場所　2021年5月15日（土）　～　2021年8月22日（日）
※全面オンライン形式にて開催

総合テーマ　“New Normal: Unity without Boundaries”
ニューノーマル：国境を越えた団結へ

テーブルトピック一覧

- Table 1
  Political Activism and Participation: Why They Take Part in Politics
  アクティビズムと政治参加: 政治参加の「なぜ」

- Table 2
  Nuclear Politics: What We can do for a World Free of Nuclear Weapons
  核の政治: 核なき世界のために、私たちにできること

- Table 3
  Food Security: How the Global Government should Sustainably Feed 8 Billion
  食の安全保障: 世界が80億人全員の「食べたい」を叶えるために

- Table 4
  Migrant Laborers: Rethinking Migrant Labor Rights in the Pandemic
  外国人労働者: コロナ禍の外国人労働者の権利を考え直す

- Table 5
  Participatory Urban Planning: Developing Inclusivity & Accessibility in the Globalized Cities
  参加型都市計画: グローバル都市における全主体者参加可能な開発

公用語	英語
活動内容	国際問題研究・ディスカッション 各種交流企画・成果発表会
参加人数	日本在住学生　33名（うち実行委員12名） 海外在住学生　32名（うち実行委員6名） 計　65名
参加国・地域国	計　21か国 日本国 インド インドネシア共和国 ウクライナ ケニア共和国 コロンビア共和国 シリア・アラブ共和国 タイ王国 台湾 大韓民国 中華人民共和国 チリ共和国 バングラデシュ人民共和国 フィリピン共和国 ブラジル連邦共和国 ブルガリア共和国 ベトナム社会主義共和国 香港 マラウイ共和国 ミャンマー連邦共和国 ロシア連邦 ※なお、上記の国・地域の正式名称は外務省のHPで記載された名称を引用。（https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/index.html）
主催	国際学生会議　International Student Conference

会議日程概要

日程	プログラム内容
5月15日	本会議および事前招集会の開会式 事前招集会1日目 　各分科会交流会 　文化交流企画
5月16日	事前招集会2日目 　学術交流企画 　参加者交流企画
5月下旬	各分科会による月例勉強会（5月区分）
6月20日	月例文化交流企画
6月下旬	各分科会による月例勉強会（6月区分）
7月15日	月例文化交流企画
7月下旬	各分科会による月例勉強会（7月区分）
8月7日	中間報告会 　各分科会による中間発表 　レクリエーション企画
8月8日	月例文化交流企画
8月中旬	集中分科会期間（各自で日程調整）
8月21日	最終成果物作成の締切 成果発表会のリハーサル実施
8月22日	成果発表会 本会議および成果発表会の閉会式

最終成果物の提出

9月下旬	分科会5が「Placemaking X」「parCitypatory.org」に提言書を提出。 分科会1が当団体ホームページにて提言書を公開。
9月21日	分科会4が特定非営利活動法人経済人 コー円卓会議日本委員会に提言書(ビジネスプラン)を提出。
10月6日	分科会5が一般社団法人スマートシティ・インスティテュート・ジャパン主催のウェビナーシリーズにおける特別企画にて、『人、力、計画。市民参加が都市をより人間的にする方法』というお題で発表。 当日の動画: https://www.youtube.com/watch?v=oIodH4til7c 分科会5の参加者が発表をしている様子
10月7日	外務省国際文化交流審議官へのご訪問 分科会2・3が外務省国際文化交流審議官に提言書を提出。 外務省国際文化交流審議官曽根健孝様へのご訪問

第67回国際学生会議参加者名簿

Table 1 Political Activism and Participation: Why They Take Part in Politics		
Fikri Panggabean	Indonesia	University of Indonesia
John Lester Teña	The Philippines	Polytechnic University of the Philippines
Vladyslava Vertogradska	Ukraine	LCC International University
Priyal Tale	India	Sant Gadge Baba Amravati University
Rascia Angelica Roldan	The Philippines	University of the Philippines Manila
Man Kwok	Hong Kong SAR	創価大学
Su Naychi Moe	Myammar	国際医療福祉大学
Mari Kiyohara 清原真理	Japan	西南学院大学
Yoko Tanaka 田中陽子	Japan	明治大学

Table 2 Nuclear Politics: What We can do for a World Free of Nuclear Weapons		
Bianca Yumi Mota Kakudate	Brazil	Federal University of Minas Gerais
Manuel Caicedo	Chile/Colombia	Diego Portales University
Chen-Yang Lin	Taiwan	University of Washington
Phu Dang Huynh Thien	Vietnam	Ho Chi Minh City University of Social Sciences and Humanities
Mustafa Sameen	Bangladesh	Colorado College
Diksha Sood	India	創価大学
Dipankar Bansal	India	早稲田大学
Ayumi Onuma 大沼あゆみ	Japan	愛知教育大学
Moe Ikazaki 五十﨑萌映	Japan	国際基督教大学

Table 3 Food Security: How the Global Government should Sustainably Feed 8 Billion		
Arthur Enrici	Brazil	Universidade Federal de Viçosa
Shu Hang Goh	India	Peking University
Warren Dwallow	Kenya	University of Nairobi
Xiyang Ge	China	Soka University of America
Le Thu Thao	Vietnam	岡山大学
Hikaru Kondo 近藤ひかる	Japan	関西学院大学
Kazuki Sawada 澤田和希	Japan	創価大学
Kazushi Tsuji 辻和志	Japan	早稲田大学
Kotaro Hayashi 林航太朗	Japan	名古屋大学
Saki Watanuma 綿沼幸紀	Japan	創価大学

Table 4 Migrant Laborers: Rethinking Migrant Labor Rights in the Pandemic		
Jeanelia Anne Yap	The Philippines	University of the Philippines Diliman
Pham Trung Hoang	Vietnam	Hanyang University
Theresia Magdalena Theofanny	Indonesia	University of Indonesia
Zainab Shihab	Syria	Middle East Technical University
Kyungmin Cho	South Korea	早稲田大学
Yuiki Goto 後藤唯希	Japan	中央大学

Kotoha Nakajima 中島小都葉	Japan	関西学院大学
Ami Nakatomi 中臣亜美	Japan	国際基督教大学
Kazumi Eguchi 江口和美	Japan	創価大学
Fumie Miura 三浦文江	Japan	創価大学

Table 5 Participatory Urban Planning: Developing Inclusivity & Accessibility in the Globalized Cities		
Amyra Aliya Kamila	Indonesia	University of Indonesia
Diana Khabarova	Russia	Saint Petersburg State University
Laurentius Kevin Hendinata	Indonesia	Universitas Gadjah Mada
Nurhan Nedzhati Fehim	Bulgaria	Varna University of Management
Wapozga Munyenyembe	Malawi	European University of Lefke
Nguyen Ngoc Chau Loan	Vietnam	名古屋大学
Sayaka Anshita 庵下さやか	Japan	創価大学
Mei Uchida 内田明依	Japan	成城大学
Ami Hasebe 長谷部亜実	Japan	青山学院大学

本会議の活動報告
全体総括

文責　青柳識

第67回国際学生会議は、「New Normal: Unity without Boundaries」（日本語表記:「ニューノーマル: 国境を越えた団結へ」）を総合テーマに掲げ、5月15日から8月22日までの期間、全面オンライン形式にて開催されました。本年度のプログラムは、学術交流と文化交流を中心に行いました。

学術交流は、5つの分科会に分かれ、各分科会が独自のペースで議論と研究を進めました。また、政策提言の策定を主目的とする学術交流では、多角的な視点を取り入れた質の高い議論を実現するべく、各課題に精通する専門家や現場で活躍されている方々をお招きし、専門領域の視点からご講評をいただきました。ご講評によって、より高度な議論と研究活動の機会を参加者に提供することができたのではないかと思います。前例のない全面オンラインにての開催であったため、参加者と実行委員、そして参加者同士のコミュニケーションが上手く取れない事態も発生しましたが、議論が進むにつれ、参加者と実行委員の間の障壁が次第に薄くなり、雑談を交えた、メリハリのあるコミュニケーションがみられるようになりました。英語に最初は自信を持てなかった参加者も、多様な国の参加者との議論を重ねることで、意見を述べることができるようになり、成果発表会においても、約90名程度の聴衆の前で堂々と発表を行う様子がうかがえました。

各種文化交流企画では、主に参加者同士の距離感を近づけること、そして各国の文化を共有することを目的に、月に1回の頻度で開催しました。また、公式で行うイベントだけでなく、共通の好みを持つ参加者や実行委員が主体的に行うイベントなども実施したことで、参加者と実行委員の結束を高めていくことができました。オンライン環境における制限はたくさんありましたが、参加者の積極性と自発性があってこそ、それらの制限や障壁を乗り越えることができたのではないかと考えます。

本年度の国際学生会議は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、いかにオンラインにて世界中の学生をつなげるかをゼロから模索する一年となりました。参加者だけでなく、実行委員との意思疎通、対面に引けを取らない企画の実行など、例年に比べより試行錯誤が多かったと考えます。その中でも、参加者、そして成果発表会にお越しいただいた方々からご好評いただけたことが、何よりの成果の表れではないかと思われます。本年度の会議が、世界中の学生同士がつながる機会として、そして今後も続くであろう「国境を越えた」交流の先駆けになってくれれば幸いです。

分科会総括

文責　マイ・ラン・チャン
翻訳　カンロンタム・ダムロンスントーンシャイ

本年度の会議では、国連サミットで採択された持続可能な開発目標（SDGs）に関連した5つのトピックが設定されました。具体的には、「目標2：飢餓をゼロに」、「目標8：働きがいも経済成長も」、「目標11：住み続けられるまちづくりを」、「目標16：平和と公正をすべての人に」などが関連性の高い目標として挙げられます。各分科会は、情熱あふれるテーブルチーフによって率いられました。彼らは、問題意識を広めることや、人々が協力して変化を起こすことを目標にしながら、世界各地から集まった参加者とともに、様々な社会問題への解決策を考え出し、国際社会にポジティブな影響を与えることを目指してきました。

はじめに、分科会1では、「アクティビズムと政治参加」について議論が行われました。参加者たちは、なぜ政治参加が重要なのかを掘り下げ、政治参加への障壁を探し、最終的には世界全体で政治参加を促す方法を模索してきました。本会議での活動を通じて、彼らは、特に日本の若者に焦点を当て、政治参加を促進する方法を研究しました。政治意識を高めるための改善案や教育分野における解決策について議論を重ねました。また、より深く掘り下げるために、参加者たちは3つの班に分かれ、具体的な課題に取り組みました。一つ目の班は、都市と農村や男女における格差、二つ目の班は、倫理的政治および地球市民教育、そして、三つ目の班は、ソーシャルメディアおよび政治的リテラシーについて研究しました。

分科会2では、「核の政治」について議論が行われました。21世紀の今日においても、核兵器は国際関係の中で非常に重要な役割を担っているため、彼らは核の政治における現状を一から考え直す方法を模索しました。彼らは、月例勉強会に加え、大学教授、活動家、除染作業に携わった元米国軍人など、多くの有識者からお話を伺うこともでき、その集大成として、日本国外務省に向けた政策提言を作成しました。

分科会3では、「食の安全保障」について議論が行われました。食の安全保障は差し迫った問題であり、パンデミックの影響で更なる挑戦を投げかけられています。この問題は貧困、気候変動、農業開発の遅れなどといった、広い要因によって引き起こされています。彼らは、食糧資源の分配を再考する必要があると強く確信しており、それによって人々が最低限の食料を得ることができると考えました。本会議での議論を通じて、彼らは日本のような先進国の企業が持続可能な食糧を生産するための方法を、どのように他国へ提供できるのかについて考えました。政策提言という形で制作された最終成果物では、食の安全保障の問題の深刻さから、インドを対象国として選び、包括的な解決策を見つけることを一つの目的として掲げました。

分科会4では、「外国人労働者」について議論が行われました。今なお続く新型コロナウイルス感染症が甚大な影響をもたらす中、日本において今となっては欠かせない存在に

なっている外国人労働者の権利を考え直すべく、彼らは外国人労働者にまつわる問題について研究を重ねました。また、外国人労働者の中でも、日本における労働資格の中で一番大きな数を占めるのは技能実習生であることから、彼らは技能実習生に注目することを決定しました。本会議での議論を通じて、彼らは、技能実習生が日本でより快適な生活を送られるように、技能実習生と日本企業をつなげるモバイルアプリの改善に焦点を当て、技能実習生の生活に役立つ方法を考え出し、最終成果物の作成に取り組みました。

最後に、分科会5では、「参加型都市計画」について議論が行われました。彼らは、都市開発のプロセスに市民による参加をより柔軟に取り入れることで、そこに暮らす人々にとって有意義な公共空間の利用を目的として議論に励みました。世界保健機関（WHO）は、2050年に、約70億人が都市に住むようになると推定しており、一定の面積に人間が集中することで、住宅、水、衛生、医療、教育などの需要が増大し、都市が長期的に持続できないという問題が発生すると言われています。これらの課題を解決するために、彼らは、最も重要な資源である「私たち人間のアクティビティそのもの」に着目し、真の意味で「人々のために、人々によって」都市が再構築されることを期待し、4か月にわたって議論を重ねました。

たとえ短い間ではあっても、第67回国際学生会議は、国際社会に向けて革新的なアイデアや取り組みを提供し、様々な目標を持つ若者に向けて有意義な学びの機会を提供することができたのではないかと感じています。本年度の総合テーマにも掲げた「国境を越えた団結」という言葉に則り、パンデミックという困難な状況下でも、世界各地から集まった学生たちに意見交換を行う場を与えることができたのではないかと思います。それぞれの課題に対する解決策を社会に発信することだけで、世界を変えることはできなくても、彼らが生み出した議論の成果が国際社会に少しでも寄与できるものとなるよう祈っています。

各分科会の月例勉強会の様子（上から順に、5月区分、6月区分、7月区分）

分科会テーマ説明

文責　各テーブルチーフ
編集　マイ・ラン・チャン

Table 1

Political Activism and Participation: Why They Take Part in Politics
アクティビズムと政治参加: 政治参加の「なぜ」

Voter turnout in America for the 2020 general election was 62.0%, the highest in over a century. Candidates and their campaigns worked tirelessly to ensure this and yet, this is low by international standards. Sweden's 2018 election saw an 82.1% voter turnout and Israel's 2020 election, 77.9%. Voter turnout in Japan for the 2017 general election was 53.68%, second-lowest in postwar Japan, even with the voting age lowered to 18. This makes the voting patterns in Japan crystal clear: even when the right to vote was granted to a flood of new young people, they did not turn out as expected. We first focused on identifying why political participation is crucial, realizing the obstacles currently in our way, naming the myriad of ways we can become active in our political circles, and lastly, pitching ways we can increase political participation across the globe. Table 1 also researched ways to increase political participation by focusing on the youth in Japan. Our key focus has been on the education sector and how improvements can be made to raise political awareness, starting from the production of educational curricula that highlight politics. To delve deeper, Table 1 members have split into three trios and have tackled an even more specific topic. The first group took up the urban-versus-rural divide, digital divide, and gender inequality. The second group took up ethical politics, protests, and global citizenship education. Lastly, the third group took up practical involvement, social media, and political literacy.

Table 2

Nuclear Politics: What We can do for a World Free of Nuclear Weapons
核の政治: 核なき世界のために、私たちにできること

On January 22, 2021, the international community placed a potential milestone in its history: the enforcement of the Treaty on the Prohibition of Nuclear Weapons (TPNW). This means that the fundamental guarantor of national security is confronting mistrust about their very existence. Since its birth in 1945, nuclear weapons have been at the center of security conversations despite the tragedies in Hiroshima, Nagasaki, and other test sites. Can we rely on these weapons despite various ongoing uncertainties? Or, should we proceed with nuclear proliferation to balance out each country's security? Table 2 explored such enduring questions surrounding nuclear weapons and delved into

the world of nuclear politics so that this topic does not remain just a distant reality. Since nuclear weapons continue to play a vital role in international relations even today, Table 2 has sought ways to rethink the status quo surrounding nuclear weapons on a zero basis. In addition to monthly sessions, Table 2 members have talked with various professionals in the field, such as a university professor, activist, and former clean-up veteran. As a result, Table 2 has produced a policy proposal for the Ministry of Foreign Affairs of Japan.

Table 3

Food Security: How the Global Government should Sustainably Feed 8 Billion
食の安全保障: 世界が80億人全員の「食べたい」を叶えるために

Every day, food has been taken for granted as the basis of our happiness and healthy life; specifically, Japan has been well-known for its advanced and diverse food culture. However, we must never forget that food availability is limited, and nearly 829 million of the world's population stays hungry at the end of the day. A lack of food security occurs mainly in third world countries due to various factors including poverty, climate change, slow agricultural development, and demographic explosion. As all individuals worldwide are ensured fundamental human rights, we need to reconsider fair distribution of food resources and ensure that everybody can meet the minimum dietary diversity standards required for healthy growth. Table 3 discussed how companies in developed countries such as Japan could provide other nations with the methods to produce sustainable food products. Meanwhile, we also approached the efficient use of scarce resources on earth and the current issue of food waste. Ultimately, Table 3 chose India as the target country for their proposal due to India's severity of food security problems.

Table 4

Migrant Laborers: Rethinking Migrant Labor Rights in the Pandemic
外国人労働者: コロナ禍の外国人労働者の権利を考え直す

With globalization, many people have started working beyond national borders. In such a situation, the Japanese government amended the Immigration Control and Refugee Recognition Act (ICRRA) to help the shortage of workers in some fields on April 1, 2019. The government has planned to accept more than 340 thousand immigrants over the upcoming five years. Nevertheless, due to the arrival of the COVID-19 pandemic, many foreign workers suffered from unstable situations. For example, 93 foreign workers were fired from a temporary staffing agency in Mie Prefecture according to the Mainichi. Furthermore, some people were reported to have been dismissed unfairly. Such "fired"

workers cannot return to their home countries, and soon come to find themselves in limbo. How can we protect such vulnerable people? Table 4 discussed what kind of actions we need to take for foreign workers and decided to aim at protecting migrant laborers' human rights, who play an essential role in the Japanese economy. Among all residency statuses, Table 4 has focused on Technical Intern Trainees, who currently represent the highest number of migrant workers in Japan. Through thorough research and discussions, Table 4 found a way to help Technical Intern Trainees before and during their stay in Japan by making suggestions for improving a mobile application that connects Technical Intern Trainees with Japanese companies.

Table 5

Participatory Urban Planning: Developing Inclusivity & Accessibility in the Globalized Cities
参加型都市計画: グローバル都市における全主体者参加可能な開発

It is estimated by the World Health Organization (WHO) that around 7 billion people are going to live in cities by 2050. A high concentration of humans per given amount of space can pose an array of problems from "hard" issues such as increased demands for housing, water, sanitation, healthcare, and educational needs that a city could not sustainably meet long-term. Not having these basic needs met could propagate problems that are less obvious and hard to quantify such as gender and economic inequality, systematic class segregation in space-use, corruption in public institutions, and prevalence of crime in low-earning neighborhoods. Urban planning authorities and governing bodies globally are mostly implementing a top-to-bottom approach in developing public spaces. The problem with this approach is that it systematically makes the public opinion and preference unincluded in the implementation of building and infrastructure projects that make cities segmented and isolated from each others' needs. To address this, we need to go back to the basics wherein we tap into the most important resource a city has to offer: the human experience itself.

Table 1

Political Activism and Participation: Why They Take Part in Politics
アクティビズムと政治参加: 政治参加の「なぜ」

Table Chief: Sarah Aoyagi
Subtable Chiefs: Minhwa Jeong, Yoshihiro Kanetaka

Table 1 covered the topic of Political Activism and Participation: Why They Take Part in Politics. Our journey began down this route for several reasons. I, as Table Chief, had the honor of presenting and pitching this topic in our initial stage taking into consideration the vast amount of research I had previously done into the topic and how pertinent it was to our current state of the world, more than ever. Majoring in Political Science, I, more often than not, surround myself with like-minded politically active colleagues, but that isn't nearly enough to start a more robust movement into the progression of political activism as a whole, hence the launch and beginning of our project.

The dual-nationality background I have and the year-long Fellowship I had done in Washington D.C. under a similar premise the year before may have helped, but what really set the stage for our Table was our Table Members, so recognition of their diligence and hard work is in order. In the early stages of the 67th International Student Conference (ISC67), we held a recruitment period to bring together minds from all over the world to work together towards a common goal, and that was exactly what unfolded. Upon undergoing multiple interviews and getting to speak with fantastic students, I, unfortunately, could only afford to provide membership to a limited number of students. Throughout the recruitment process, something that I kept in mind was the importance of diversity and inclusion. I saw this as an opportunity to further expand our horizons and get the most out of the global perspectives each individual possessed. With the diversity aspect a success, the next step was to what extent that was to be incorporated into our monthly meetings.

Throughout our monthly meetings, the Table Members, the two Subtable Chiefs, and I gathered remotely and dove headfirst into deep discussions pertaining to our topic. In these meetings, what I valued and kept at the forefront of my mind was allowing the Table Members to engage as much as possible and that I was simply there to provide a platform where thoughts could be freely expressed with an unwavering no-prejudice policy. It was crucial that we provide a safe environment where ideas were exchanged and passion was released. Seeing from the interviews, I was already fully aware of the passion that the participants had for the topic. Each individual had a multitude of background experience in several fields pertaining to political activism whether it be participating in protests, research, or other conferences, and the meetings truly were an

environment where each member brought forth something fresh and new onto the table every single time. It alleviated the inevitable drag that online meetings tend to have nowadays and I am eternally grateful for the lively and active participation of the members. It was a very much inclusive and cutting-in allowed sort of environment we were able to cultivate, and I can only hope that the meetings were as fruitful as they were a learning experience for me. Specifically, in our first couple of monthly meetings, we were still in the stages of getting to know each other and therefore engaged in icebreakers but also tied that in with our topic at hand by having each member present in their home country to the whole group. For me, this was a direct insight into each member's presentation skills, studying habits, organization skills, and overall researching skills, which in hindsight proved to be a huge plus when starting work on the Policy Proposal a couple more weeks down the road.

With what limited time we had at our disposal, the icebreakers were cut shorter than we would have hoped, for dividing and conquering the Policy Proposal was in order. This being the primary element of our Conference, it was pivotal that we engage in our project in an orderly manner and that everyone was on the same page at all times. Our Policy Proposal includes a literature review, findings, and policy proposal as its three main pillars. The literature review section was conducted by three of our researchers who screened through multiple sources extensively and read through several texts to best encapsulate our goal of promoting political activism to the youth of Japan. They observed several case studies as well of countries and their governments who have taken up several policies to better educate the youth on government. Additionally, one of our literature reviews is on a piece of research specifically honed in on the case of our current pandemic and how that has affected political participation as well as how we can combat such situations in the future in terms of maintaining political activism. The findings section, hand-in-hand with the literature review, is a deeper analytical segment based on the literature reviews. Here, a separate trio of researchers teamed up with the literature review team to take a look at the same pieces of text but with a more concise and analytical eye. They observed the texts and scrutinized them, focusing on the applicability of certain case studies to Japanese society.

The policy proposal section, worked on by a final trio of our researchers, is the main segment of our Proposal. Here, we defined the problem including our purpose in pursuing the topic and some background information, assembled evidence, pitched the logistics such as time, location, and the subject of implementation, constructed alternatives, selected the criteria, and projected the outcomes/beneficiaries. To go into specifics, the three topics we pursued include 1) urban v. rural divide, digital divide, and gender inequality, 2) ethical politics, protests, and global citizenship education, and 3) practical involvement, social media, and political literacy. Among these, we are particularly excited to share the digital divide, gender inequality, global citizenship

education, and social media components, as we believe that these aspects, in particular, are key in raising the incoming generation of political leaders.

Some communication tools we utilized to further our work into a more engaging atmosphere were Facebook Messenger and Slack. As with other Tables, Messenger was primarily used for miscellaneous chat messages sent amongst the group. This was a casual platform we used to further our personal ties outside of the professional work we were engaging in. On the other hand, our Slack page was used mainly for the purposes of serving as a document storage page where all of our finished products could be easily and conveniently stored, as well as a place for general announcements, tasks, scheduling, and agendas to be posted.

It was an honor and absolute privilege to be able to work on behalf of ISC67 and I'd like to take this opportunity to again express my deepest gratitude to our Table Members, Subtable Chiefs, and the Committee for allowing me on this journey and providing me a platform that encouraged so much active communication and engagement. It was truly an experience I will treasure for a lifetime albeit the difficult situations faced during such trying times. I can only hope that the discussions that were sparked could provide a glimmer of hope and progress for future generations to come as well as the world we live in now. Despite 'togetherness' seeming to be an almost foreign concept now, it is through acts displayed in ISC67 where we're awakened again to see that when bright and passionate people get together for a common cause, there is not a single thing that can hinder or get in the way. We owe our contributions to the passions of our current generation.

Table 2

Nuclear Politics: What We can do for a World Free of Nuclear Weapons
核の政治: 核なき世界のために、私たちにできること

Table Chief: Shinsaku Takikawa (Chris)
Subtable Chiefs: Silmi Nur Az Zahra,
Kanlongtham Damrongsoontornchai

Table 2 set its topic as "Nuclear Politics: What We can do for a World Free of Nuclear Weapons," and we have produced a policy proposal toward the Ministry of Foreign Affairs of Japan (MOFA) as a result of our monthly discussions and advising sessions with mentors.

The topic was decided because nuclear weapons are still playing a significant role in international politics. The division and distrust caused by nuclear weapons, as demonstrated in the NPT and TPNW, supposedly affect every aspect of diplomacy. However, youths tend not to take this topic seriously probably because they think they can do nothing about a big-scale matter such as nuclear weapons. However, under the unstable circumstances owing to COVID-19, such fundamental division and distrust could result in hazards. Therefore, the Table Chief has determined to create a sacred place for students from all over the world to take the first step together.

Table 2 welcomed eight students from six countries, including Japan, India, Taiwan, Brazil, Chile, and Vietnam. We had two-hour-long monthly discussion meetings from May to August. Members watched a documentary film on nuclear weapons issues before each meeting and discussed their own analysis of the film. This activity introduced members to the main discussions of the day, such as the validity of nuclear weapons. The members actively participated in discussions with their unique backgrounds and experiences at each meeting. For example, a member in law major contributed to developing the idea for the legal aspect of the policy proposal, and a Taiwanese member utilized his specialty in colonialism.

As a result, we have finished writing a policy proposal and we have received a precious opportunity to have our proposal submitted to the Ministry of Foreign Affairs of Japan. We hope that our voice will reach the national and international levels of policies and make change even by little. Lastly, we would like to appreciate everyone who has supported Table 2, especially Dr. Holly Barker, Mr. Akira Kawasaki, Ms. Sumiko Hayakeyama, and Mr. Kenneth Brownell.

Table 3

Food Security:
How the Global Government should Sustainably Feed 8 Billion
食の安全保障: 世界が80億人全員の「食べたい」を叶えるために

Table Chief: Minori Kawaguchi
Subtable Chiefs: Shiki Aoyagi, Nao Tamura

The discussion topic of Table 3 was "Food Security: How the Global Government should Sustainably Feed the 8 Billion". The reason for choosing this topic can be explained in two ways. On one hand, I felt a sense of duty to consider justice for the distribution of food resources in the world as a person who has never directly encountered the problem of hunger or malnutrition. Similarly, most of the participants in Table 3 as well as ISC67 have lived in relatively fortunate circumstances. However, in reality, there are millions of people in the world who stay hungry at the end of the day. Therefore, it is important to comprehend the issue around the disadvantaged to know more that there is a limited amount of food resources, which we never waste, recorrecting our own behavior.

On the other hand, the topic of food security can be approached from a very different perspective. For instance, if we focus on efficient nutrition making, we could examine how food products can increase their nutrition level, which can be considered to be a field of science. Or, if we discuss poverty, as one of the most crucial factors of food insecurity in a country, knowledge from economics and politics would be very useful. Likewise, I found this topic of "Food security" interesting to discuss from a different perspective, incorporating ideas of students who study at different faculties.

This viewpoint led to my vision for recruiting table participants. As the table chief, I emphasized "diversity", and I eventually selected ten students, each of whom has a very different background as well as various academic interests. In the middle of May, our journey as Table 3 began as the conference took off. The first step of our conference was to narrow down the topic as the topic of food security could be considered too broad. We explored four different countries which have been tackling food insecurity; namely, India, Brazil, the United States, and Vietnam. Regarding each country, we considered the most significant issue of food insecurity, factors of the issue, and potential actors who can contribute to solving the problem. After the majority vote, we agreed upon exploring solutions to the problem in India as our target country. Then, we separately researched food insecurity in India from three factors: production, culture and education, and supply chain. Teams of four people had intensive discussions and tried seeking solutions. In the meantime, we held a mentor session with officers from Japan International Cooperation Agency (JICA) in India to hear the voices of the locals and the

situation in the country in detail. Eventually, the policy recommendations we proposed to the whole organization of ISC67 as well as the Ministry of Foreign Affairs in Japan included the improvement of the water circulation system, education among young females, and food banking processes. Those solutions are also intended to promote aid and cooperation by Japanese organizations; as a consequence, the diplomatic relationship between India and Japan will be strengthened.

Over the course of four months, It was slightly difficult to keep online discussions engaging, considering the individual circumstances of all members. Each time of online study sessions, a few members were selected as facilitators and took the lead of discussions. Moreover, not only academic conferences but also we had many cultural exchange activities such as online drinking parties with snacks and drinks from members' home countries and watching a movie together. Those events greatly helped for team building as well as maintenance of motivation of members to enjoy and work hard in academic activities. To conclude, as the table chief, I hope all activities in Table 3 have been able to encourage all the members to participate in international communities in the future and actively take action towards solving various global issues.

Voices of Participants

Text: Arthur Enrici Wakim

Participating in ISC67 was one of the most amazing experiences I could ever have. It was a great opportunity to test my English, make friends in different countries, learn a little more about Japanese culture, some customs, and discuss global food safety. I learned a lot about different aspects of food security, such as the production chain, the technologies that can be used to our benefit, actions that we could take to reduce discrepancies in food security within our countries. For me, especially, this topic was very enriching as my native country, Brazil, is facing a serious crisis related to it. In this way, I was able to show the group some measures that we are implementing, such as food banks.

However, the most important thing for me was to create bonds of friendship with the participants in Table 3. The fun moments were really cool and served for us to get to know each other better, even though the distance between each one was huge. For me, it was very special because it was one of the first international interactions I had. I was able to discover how fantastic it is to talk to people from different backgrounds, different languages , and customs. It made me grow a lot, both personally and professionally. I definitely enjoyed being part of the ISC67 Family.

参加者の声

文責　綿沼幸紀

ISCは多様な人に出会えることが魅力です！普通の学生生活を送っていたら出会えないような他大学の学生や世界中の友達に出会えたことがISCに入って一番よかったと感じたことです！地球規模の課題について、多種多様な人と意見を交わした経験は私の視野を大きく広げてくれました。また、私は就活や留学準備の時期と重なっていたため、両立できるかが不安でしたが、テーブルチーフがいつも気にかけてくださったおかげで最後まで楽しく続けることができました！

Table 4

Migrant Laborers: Rethinking Migrant Labor Rights in the Pandemic
外国人労働者: コロナ禍の外国人労働者の権利を考え直す

Table Chief: Momoka Takagi
Subtable Chiefs: Yuka Ariga, Dao Duy Doan

First, as a Table Chief of Table 4, I would like to express my gratitude to everyone who has cooperated with me in ISC67. Thanks to all of your support, we were able to go through an entirely online conference. Let me start with how I decided the topic. I had initially planned to focus on the economic growth and the impact of COVID-19. However, I decided not to focus on that one and decided to focus on migrant workers in Japan instead. There are many types of people among migrant workers. I first contacted Professor Okuda, who is one of our mentors. She gave me a piece of insightful advice that, in most cases, those who face troubles with migrant laborers are low-wage workers in Japan. At this point, I have decided to narrow down the scope of the research to Technical Intern Trainees. However, at that point, I still did not have enough knowledge about them, so I started off by studying the history and content of the program.

Next, I would like to review the first half of the Main Conference. Up until this point, I still did not have much knowledge about the Technical Intern Trainee Program, so I assigned a few assignments to my table members so that they could understand the program more deeply. Then, we decided on a more specific topic to write for our final paper. I divided members into four pairs to encourage communication between members. Since we did not have much time to wander away from the main topic, I thought we needed to make time for ourselves to discuss those issues too. Also, we addressed the issue of Japanese programs, so I thought working with Japanese speakers would enable international participants to reach out for more sources. After the pairs worked, each of them presented the issue they found. Then, we narrowed it down to focus on the platform issues.

During the first half, it was a really hard time for me. Even though I planned before each session, most plans did not work well. I also felt the pressure of being a Table Chief. Nevertheless, thanks to the cooperation of Subtable Chiefs and the Table Members, we were able to make progress steadily. During the latter half of the Main Conference, we continued to work according to the topic we decided to focus on. As the final product, we put importance on the feasibility of the proposal. Therefore, we chose not to submit our final product to the Japanese government, and instead chose to submit to the organization of Ms. Okada who is also one of the mentors at Table 4. I think this decision is the biggest difference compared to the other tables. And after deciding the

place to submit, we started writing the final paper. However, we faced one problem. Two members left our table along the way. This was difficult for me because I know that there are so many applicants who applied for the ISC67 and were rejected. However, we had no choice but to keep working, so the remaining members, including myself, the two Subtable Chiefs, and the six members, continued to work hard until the end. Finally, we could complete the proposal by the deadline and could present our final product at the final forum.

As a Table Chief, I really think I should have considered many possible outcomes. In the beginning, I thought we would be able to finish working with all the members, and I have not thought about the possible members leaving. So, that was the one thing I needed to change. However, thanks to the hard work of the members, our table was able to finish the tasks. That was fortunate, but as the chief, I need to be more careful in the future. Also, even though I tried to promote communication between the members, it was not so easy to do that. It may have something to do with being online, but when I watched the presentation of other tables which have conducted drinking nights or something like that, I thought I need to be the one who plans to do such activities. There are so many things that I should have done, but as a whole, Table 4 did our best and all members worked hard to achieve one goal. So, I am satisfied with the result and the achievements of Table 4.

Proposal Paper as the Final Product

The purpose of the final paper is to propose our plans to the organization which provides the Hello Ninja application. Hello Ninja is a smartphone application that aims to help mostly migrant workers in Japan. So, we thought that is the most suitable app as the platform to support Technical Intern Trainees. In the paper, we proposed a main proposal and an additional proposal. As the main proposal, we proposed adding a chat function to the app, since we aim to promote exchange between not only Technical Intern Trainees (TITs) but all migrant workers, including, other residency status workers, past TITs, and future TITs. With such a function, we thought Hello Ninja could be a more effective platform for them. Also, as an additional proposal, we proposed changing the name of the application. As the new name, we proposed "Kizuna". The term *kizuna* is a Japanese word that means human bonding. As a platform, we thought the visibility of the app and purpose would be important, so we suggested changing the name of the application. To realize our proposals, funds will be needed. So, we also suggested some ways to raise money, such as in-app advertisements and asking for financial support from the government. By doing so, we thought we could prepare funds for our proposals. At the end of the paper, we highlighted the importance of human relations and the potential of Hello Ninja to be the platform to connect all migrant workers in Japan.

Table 5

Participatory Urban Planning:
Developing Inclusivity & Accessibility in the Globalized Cities
参加型都市計画: グローバル都市における全主体者参加可能な開発

Table Chief: Patricia Anne Calma
Subtable Chiefs: Masami Komatsu, Midori Dobashi, Soma Nishimura

This year, Table 5's topic, entitled "Participatory Urban Planning: Developing Inclusivity in the Globalized Cities", discussed the importance of urban planning, the combined science, and art that concerns the human relationship with the built environment. As Table Chief of this continuing dialogue, I am grateful to so many entities who made Table 5 a success: the Planning Committee, Academics, the international and Japanese table members, and of course, Table 5's own Subtable Chiefs.

Ever since the Table Chief application period from November 2020, I was already set on establishing a student-led dialogue on urban planning and the importance of how the built environment shapes the human psyche. Currently, the model for how the built environment is built in the majority of the world is primarily driven by those whom we consider as merit-based authorities such as architects, urban planners, developers, governments, etc. which are while not entirely a bad thing, serves as a reason to why how decision making in urban development is rigid and high-barrier. This becomes a problem eventually because once the physical environment is finalized through building infrastructures and developing fixtures, the process becomes difficult to reverse. The irreversibility and the relative permanence of space use can be problematic in the long term because it is susceptible to be unyielding to the ever-changing nature of human needs. An environment that might have served an immense function to its inhabitants decades before might be negating the very same effects when a place is eventually incapacitated to sustain a population past a certain level, changed its economic priorities and shifted how it delivers the needs of the people. This is why civilian participation is important when it comes to urban planning - it prevents a one-sided decision-making process that might not be privy to the public opinion that could have otherwise added value to how changes and developments are enacted in the urban planning scene. Civilian participation, especially youth participation, should be tapped as a resource on how land developers and the government could form the urban scene today. If the youth is empowered in their opinions and can actively contribute to how the cities of the future work, function, and look, they are given a platform for action that can further impact the future generations. That is why I was elated and at the same time healthily challenged once the Table Chief announcement was out, including my name. It all begins in a dialogue, and dialogue was what Table 5 has contributed for ISC67.

Table 5 started off its conference program with Session 1, a theory-focused discussion that highlights using digital tools to involve inhabitants as a method of crowdsourcing data for space improvement suggestions. For Session 2, Table 5 invited an Environmental Planner and Ph.D. student from the Faculty of Urban Engineering at the University of Tokyo, Joeylyn Marty, wherein she discussed the challenges and opportunities an urban planner faces from her experiences as an expert in her field. For Session 3, each Table Member is invited to present a case study from their respective home countries that demonstrate the theory they learned in Session 1 and apply urban planning research skills from Session 2. For Sessions 4 and 5, our Table focused on creating our Final Output and Final Forum presentation that includes recommendations on how to make urban development more inclusive by using case study examples from Japan, Indonesia, and the United Arab Emirates. It was a genuinely humbling experience to have presented our Final Forum topic to the esteemed guests that ISC67 invited.

Admittedly, this conference was new to everyone due to the pandemic pushing the originally planned format from a physical week in Japan to a months-long journey online. Luckily, the ISC67 planning committee was effective in letting the Table Chief and members oriented and up to date with schedules, holding recalibrating meetings as regularly as possible. This format enabled the different tables to plan their respective table syllabi ahead of the conference that allowed creativity and of course. We also reached a variety of wider audiences from Table Member applications that were only possible because of the virtual setting.

As Table Chief, I have experienced the most challenges towards the end of the conference due to sudden changes in the commitments made by the originally planned receiving body, the Ministry of Foreign Affairs. Thankfully, our team members have proposed multiple alternatives that we can submit. At the end of the conference, we were able to submit a Case Study on the Japanese practice of Machizukuri as seen in Yokohama Dōbutsu-no-Mori Park featured by urban planning consulting platform and urbanism blog parCitypatory.org that highlights how Yokohama established a park management system called Park-PFI, or Public Participation in Park Management that involved the locals in the maintenance and operations of the park. In addition, we have also conducted a student-led workshop and discussion for Smart Cities Institute Japan titled People, Power, Planning: How Citizen Participation Can Make Cities More Human, wherein we will be analyzing different case studies of urban planning practices from Japan, Indonesia, and the United Arab Emirates to recommend future steps for effective urban development involving civilians. Despite the change in submission place, Table 5 was active in finding solutions that made the challenge worthwhile. It is an honor to have these platforms honor our submissions that could hopefully be a source of interest for our fellow students to learn more about how the youth can contribute to ensuring that the future of cities is truly for the people and by the people.

I can say with great appreciation for Ming, Koma, Lan, Midori, and Soma for being the most hard-working leaders I have had the honor of interacting with during the conference especially when I was experiencing personal difficulties whether with clashing schedules, health emergencies, and even a natural calamity. I have definitely learned the value of adapting to challenges once they are presented and learned how to work better with an international virtual team across time zones and across collaboration software. My time with ISC67 and Table 5's members is surely noteworthy because it felt like I knew them for a very long time without even meeting them in person. I wish the committee members and table chiefs for ISC68 all the best in the world for their turn to create a conference that will be remembered.

中間報告会

文責　カンロンタム・ダムロンスントーンシャイ

2021年8月7日に、オンライン（Zoom）にて、中間報告会を開催しました。当報告会は、大きく3つのパート（各分科会による中間報告、全分科会の参加者を交えたレクリエーション企画、実行委員会の役職紹介）で構成されました。第1部に行われた中間報告会は、各分科会における議論の進捗や最終成果物の作成状況、また本会議の最終日に行われる成果発表会までの見通しなどを、他の分科会に所属する参加者に向けて発表することを主目的に開催したものです。第2部に行われたレクリエーション企画は、全分科会の参加者の親睦を図ることを主目的に実施したゲームや交流会のことを指します。第3部に行われた実行委員会の役職紹介は、本年度の参加者に実行委員の仕事に興味を持ち、次年度の実行委員として応募してもらうことを主目的に実施したものです。なお、当日のプログラム内容は下記の通りとなります。

	時間 （日本時間）	**プログラム内容**
第1部 （学術主導）	18:00～18:05	集合・プログラムの説明
	18:05～18:15	各ブレイクアウトルームにて各分科会による最終確認
	18:15～18:50	分科会1・2・3による中間報告のプレゼンテーション （発表時間：7分／相互評価・質疑応答の時間：5分）
	18:50～18:55	休憩
	18:55～19:20	分科会4・5による中間報告のプレゼンテーション （発表時間：7分／相互評価・質疑応答の時間：5分）
	19:20～19:25	分科会5所属参加者による特別発表
	19:25～19:30	学術担当によるフィードバックおよび注意事項の説明
第2部 （企画主導）	19:30～19:35	休憩
	19:35～20:10	レクリエーション企画 ・お絵描き伝言ゲーム（Pictionary） ・山手線ゲーム（Yamanote Line Game）
第3部 （学術主導）	20:10～20:15	休憩
	20:15～21:00	現役の実行委員による役職紹介 集合写真・解散

各分科会による中間報告

当日は、分科会1から分科会5までの順で発表を行いました。各分科会の発表時間は7分と定め、各発表の直後に5分間の質疑応答の時間を設定しました。相互フィードバックにできるだけ多くの参加者に参加してもらえるよう、その場で挙手して直接発言することや、チャット機能を通じて質問を挙げることだけでなく、事前に用意した各分科会特有の「フィードバックフォーム」を通じてフィードバックすることもできるように工夫しました。口頭で直接発言した参加者もいれば、フィードバックフォームで意見を寄せた参加者もいたため、様々なコミュニケーション・スタイルに合わせた発言の機会を提供することができたではないかと感じています。中間報告会で得られたフィードバックなどは、各分科会が最終成果物の作成に取り組むにあたって大事な意見・客観的評価であり、最終成果物の質の向上にもつながるため、中間報告会そのものが本会議プログラムにおいてとても重要な役割を果たしているのだと改めて実感しました。

レクリエーション企画

月例交流企画の主目的である「異文化交流」や「異文化体験」とは異なり、中間報告で感じられた緊張感を和らげるべく、ここで用意した2つのレクリエーション企画の主目的を、単に「参加者に楽しんでもらうこと」と設定しました。はじめに実施したレクリエーション企画は「お絵描き伝言ゲーム（Pictionary）」でした。Zoomの画面共有・ホワイトボード機能を活用し、実行委員が事前に用意した例題を参加者に絵を描いてもらいました。残りの参加者は、30秒内に前の人が描いた絵は何だったのかを当てようとし、参加者全員がお絵描きの担当をしてもらえるように順番を調整しました。次に実施したレクリエーション企画は、日本では有名な「山手線ゲーム（Yamanote Line Game）」でした。山手線ゲームとは、ゲームマスターが出題するテーマに合致している言葉を順番に言っていき、途中で言葉を言えなくなった者や、お題に該当しない言葉を言ったしまった者が敗者するゲームのことを指します。ルールは容易であることから、このゲームを初めて知った参加者にもゲームを楽しんでもらえました。

現役の実行委員による役職紹介

本年度の参加者に実行委員の仕事に興味を持ち、次年度の実行委員として応募してもらうべく、現役の実行委員による役職紹介を行いました。本年度は全面オンラインにて活動を進めたため、参加者に実行委員の仕事について知ってもらう機会が非常に限られました。次年度の実行委員を参加者から募るために、本会議期間中に実行委員の仕事に知ってもらう必要があると考え、中間報告会を機に実行委員会役職の紹介を行いました。各役職からは、各自の仕事内容（通常開催・オンライン開催の両方を含む）、役職における繁忙期、役職に求められるスキル・能力などについて紹介しました。また、中間報告会終了後に、参加者が自由に現役の実行委員と歓談できる時間を設定しました。

成果発表会

文責　小松正実

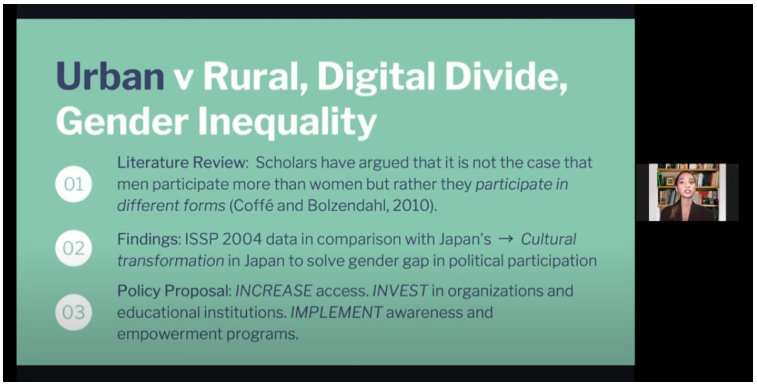
本会議の最終日にあたる2021年8月22日に、オンライン（Zoom）にて、成果発表会を開催しました。成果発表会は、各分科会の議論や提言の内容を一般向けに発信することを主目的に開催する弊団体最大のイベントです。また、国際情勢に詳しい有識者をお招きし、講演や観覧客と各分科会の学生が交流できるセッションも行い、共に考える場とすることを目指しました。当日は来賓客を除き、91名の一般観覧客（内訳：大学・大学院生48名、社会人30名、その他13名）にご参加いただきました。当日のプログラムは以下の通りです。

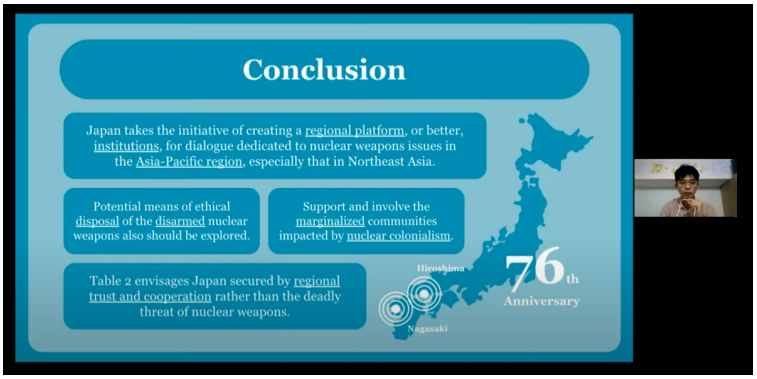
	時間 （日本時間）	**プログラム内容**
第1部 （開会宣言）	18:00～18:10	集合・プログラムの説明 （使用言語: 英語（英）/日本語（日））
	18:10～18:20	開会宣言（英・日）
	18:20～18:25	ご来賓のご挨拶 （藤崎一郎氏）（英・日）
	18:25～18:40	第67回国際学生会議活動報告（英・日）
第2部 （分科会発表）	18:40～18:45	分科会成果発表会概要説明（英）
	18:45～19:30	分科会1・2・3による最終成果発表 （トピック紹介：2分／発表時間：13分）（英）
	19:30～19:40	協賛企業様による登壇発表（英・日）
	19:40～20:10	分科会4・5による最終成果発表 （トピック紹介：2分／発表時間：13分）（英）
第3部 （ご講演）	20:10～20:50	ゲストスピーカーセッション （高須幸雄氏・齋藤幸平氏）（英） （発表時間：各20分）
第4部 （閉会宣言）	20:50～21:00	閉会宣言（英・日）
第5部 （交流会）	21:00～21:30	観覧者向け交流会（英・日）

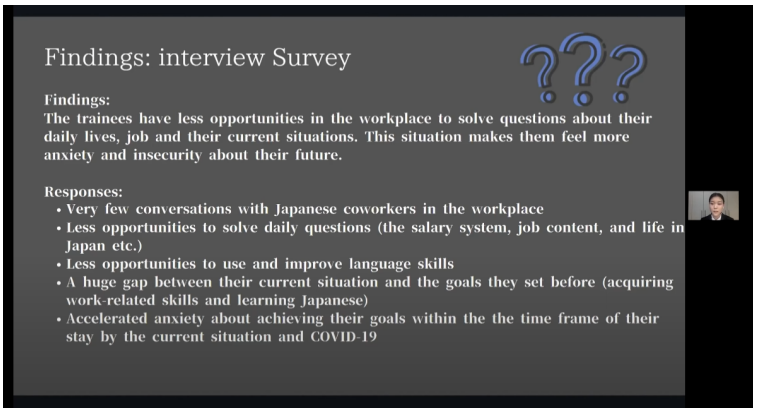
当日ご来場いただいたご登壇者様（左から順に、藤崎一郎様、高須幸雄様、斎藤幸平様）

- **開会宣言・ご来賓のご挨拶**：第67回国際学生会議代表による開会宣言の後に、国際教育振興会賛助会会長藤崎一郎氏より、ご来賓のご挨拶をいただきました。
- **第67回国際学生会議活動紹介**：本年度、5月15日～16日に開催された事前招集会から8月22日までの約4ヶ月のプログラムを詳細にて説明しました。5つの分科会に設置した学術交流や、毎月の文化交流企画の様子を紹介しました。
- **各分科会による成果発表**：各分科会が設定した課題と提言の内容を15分間の発表にまとめ、来賓客、観覧客向けに発表しました。元国連事務次長高須幸雄氏より「とても印象深いプレゼンテーションだった」とお言葉をいただきました。
- **協賛企業様による登壇発表**：本年度開催の協賛企業の一つである、株式会社エックス都市研究所の事業紹介映像を放映しました。
- **ゲストスピーカーセッション**：本年度は、現国際連合事務総長特別顧問（人間の安全保障担当）高須幸雄氏に分科会へのご講評を、また「人新世の資本論」の著者、大阪市立大学大学院経済学研究科准教授、齋藤幸平氏に、「アフターコロナの社会のあり方」と題してご講演いただきました。
- **閉会宣言**：第67回国際学生会議代表より閉会宣言を行いました。
- **観覧客向け交流会**：当会議参加者と観覧客が交流し、自由歓談や意見交換ができる時間を設けました。当セッションに、約10名の方々がお越しいただきました。
- **事後アンケートの結果**：10段階評価で、8以上の「満足度」に「100%」の人がご回答いただきました。また、「最も印象深かった」のは「ゲストスピーカーセッション」で、「本イベントを知り合いに紹介したい」とご回答いただいたのは、全体の「75%」に上りました。

※成果発表会の模様は、弊団体のYouTubeチャンネルにて全編をご視聴いただけます。
https://www.youtube.com/watch?v=xe2Iedqihrw&t=3937s







各分科会による成果発表の様子

第67回国際学生会議代表による開会宣言の様子

各種交流総括

文責　金高哲大

第67回国際学生会議においては、開催方式がオンラインであったため、例年よりも参加者・実行委員同士の交流に重きを置きました。この目標に設定した理由は、ダニエル・キム氏の『成功循環モデル（Core Theory of Success）』の中で、チームの関係性が最終的に結果の質を生み出すということを明かにしており、その良好な関係性を一番効率的に作り上げることができるのは、交流活動だと考えたからです。

月例交流会や事前招集会の参加者の方々のフィードバックを見る限りでは、当初の目的を達成できたのではないかと思っています。また、各種交流企画があってこそ、参加者同士の親睦を図ることができ、各分科会における学術交流の質を向上させることができたのではないかと考えています。しかし、残念ながら、4ヶ月に渡る月例交流会の出席率が段々と下がっていったたこと、また、コロナ禍という不確実性を常に抱えた状況下において、様々な企画が途中で頓挫せざるを得ませんでした。そのため、実行委員の一員として、参加者・実行委員同士の仲をより深めることができたのかもしれないという悔いは残っています。

その一方で、参加者の方々からは、交流企画への感謝の言葉や会議終了を惜しむ言葉が相次ぎ、その上、来年度の第68回国際学生会議にも是非参加したいという声も出たため、コロナ禍においてできる限りの交流活動は企画できたのだろうと感じています。

結論として、各種の交流活動によって、部分的ではありながらも参加者・実行委員の仲を深めることができ、それに伴い、各分科会のディスカッションや政策提言の質も高めることができました。また、各種交流企画を通して、各国の文化への理解を深め、オンラインによって起きる疎外感を緩和させ、本年度の総合テーマである「New Normal: Unity without Boundaries（日本語表記:「ニューノーマル: 国境を越えた団結へ」）」の実現に貢献することができたのではないかと考えています。

月例交流企画

文責　金高哲大

6月区分

初の月例交流会は、6月20日に開催され、参加者・実行委員合わせて40人弱が参加しました。6月の月例交流会では、目的を「お互いをより理解するため」と定め、2つのレクリエーションを企画しました。1つ目のレクリエーションでは、「ワードウルフ（Word Wolf）」を企画し、制限時間の中でお互いが与えられたお題についてどう思っているかを共有・議論し、交流を深めました。また、2つ目のレクリエーションでは、「Kahoot」というオンラインサービスを活用し、「バーチュアル・トリビア・ナイト（Virtual Trivia Night）」という題名でクイズ大会を開催しました。各実行委員から集った国際学生会議関連のクイズや世界のトリビアを出題することで、各自のバックグラウンドに対する理解を深めることができました。また、オンラインツールを積極的に採り入れることこそ、オンラインで活動を進めるにあたって大事な工夫だったのではないかと思いました。

全体の評価においても、参加者の方々から非常に高い評価（平均10点中9.6点）をいただくことができました。また、学術的な側面が色濃い国際学生会議において、月例交流会は緊張を緩める場であるため、会議開催にとって重要な役割を果たしていると実感しました。

7月区分

2回目の月例交流会は、7月17日に開催され、計20名程度に参加していただきました。7月の月例交流会では、目的を「各国の『文化』の枠を越えて、お互いの豊かな個性や特徴を知るため」と定め、「スペシャル・タレントショー（Special Talent Show）」という1つのレクリエーションを実施しました。当企画では、各国の伝統や風習に留まらず、参加者一人ひとりの「自分らしさ」についても知ってもらうべく、「文化交流」そのものの定義や構図を見直し、真の意味で「国境を越えた」交流の場を提供できるように企画しました。この企画では、月例交流会の前に、参加者の方々に自分の特技や趣味に関して、動画や写真を用意してもらい、当日各ブレイクアウトルームで発表するという形で進行しました。参加者の方々からは、書道、バレーダンス、料理、美術など様々な特技を用意していただき、より仲を深めるとともに、節々に感じる各国の文化の特徴を肌で感じてもらうことができました。

初回に続き、今回の交流会においても、参加者の方々から非常に高い評価（平均10点中9.6点）をいただき、また「第67回国際学生会議のことがより好きになった」という非常に前向きなコメントもいただくことができました。これまでの企画とは異なり、事前に参加者の方々に動画作成などの用意をしていただければならないという点で、多くの懸念を抱えていましたが、アグレッシブな姿勢のおかげで無事に企画を成功に収めることができました。

8月区分

最後の月例交流会は、8月8日に開催され、計20名程度の参加者の方々に参加していただきました。集中分科会期間（8月8日～8月21日の期間）の直前、中間報告会の翌日という日程であったため、参加者の人数はあまり多くはありませんでした。8月の月例交流会では、目的を「日本の文化を知ってもらうため」と設定し、3つのレクリエーションを企画しました。1つ目のレクリエーションでは、サイコロの目を転がし、その出目によってお題を話す「ダイス・トーク（Dice Talk）」というゲームを行い、今年の冬にしたいことや分科会のトピックについて共有していただきました。2つ目のレクリエーションでは、出題者が考えていることを限定された質問を通じて当てる「アキネイター（I'm thinking of something）」というゲームをし、3つ目のレクリエーションまでに上手くアイスブレイクをすることができました。そして、3つ目のレクリエーションでは、日本の文化をお題としたクイズ大会を企画し、日本人でも知らなかったようなトリビアを通じて日本の理解へとつなげることができました。

参加者の方々からは、交流会が終わってしまうことの名残惜しさを嘆く声、今までの交流会開催への感謝の声をいただくことができました。各々が政策提言のための会議や書類作成をしている中で上手く参加者の方々がリラックスできる場を設けることができたのではないかと思っています。

※備考：5月区分は、事前招集会開催のため、別日の文化交流企画は予定されていませんでした。交流企画は5月15日～16日開催の事前招集会の一部として実施されました。

部活動紹介
（Club Activities）

文責　滝川伸作

第67回国際学生会議において最も懸念されたのは、対面での本会議に比べ、共にする時間が短いオンライン環境の中で参加者同士が仲を深めることができるのかということでした。そこで実行委員会は、共通する趣味を持つメンバー同士で構成されるクラブ活動を行うことを発案しました。多様なクラブの案が出た上で、最終的にK-Pop、料理、アニメ、言語の4つのクラブが6月中旬に発足しました。時差等の条件も鑑みて参加者のクラブ活動への参加は任意とし、10名程度の参加者を募ることができました。それぞれのクラブ内でテキストベースのコミュニケーションやZoomミーティングを行い、参加者間の連帯感向上に寄与したと思われます。

クラブの運営は第67回国際学生会議実行委員を中心に行い、運営方法について参加者からの積極的な意見もありました。会議終了後も継続してミーティングを開くクラブもあり、深い友情を築く機会となったことがわかります。このクラブ活動を通して、対面で会うことのできない状況においても多様な国に友人をつくり、継続してコミュニケーションを取れるいうことを運営メンバーは実感しました。次回以降の会議のフォーマットは決定していませんが、たとえオンライン開催になったとしても、参加者同士の繋がりを強固にすることができるということを第67回国際学生会議は示すことができました。

終章

謝辞

ご協力いただいた方々

協賛企業

株式会社トランスアクト

株式会社エックス都市研究所

帝人株式会社

NOMON株式会社

後援企業

株式会社MIRAIing

株式会社ボーダレス・ジャパン

助成

国際教育振興会賛助会
一般社団法人MRAハウス
双日国際交流財団
三菱UFJ国際財団

後援

外務省
文部科学省

寄付金支援者の皆様

石塚啓太 様
内田崇 様
竹川勝治 様
中嶋秀昭 様

より多大なるご支援をいただきました。

クラウドファンディング支援企業様

HOKUSHIN

ISSHIN Amsterdam

SDGs AICHI EXPO

クラウドファンディング支援者の皆様

有限会社シェ・イシダ（石田 寛）様
萬本浩也様
ISSHIN Amsterdam様
Tomohito Fujihira様
S.TAMURA様
ピーター　D．ピーダーゼン様
Hirohisa.K様
Toru & Yasuko Uda様
佐村礼二郎様
Masahiro Fuke様
岡本亜美様
T. S. Komatani様
Masahiko Wada様
北島隆次（Takatsugu Kitajima）様
Tami Hashimoto様
黒田一雄様

を始め、40名の皆様にご支援いただきました。

学術面でご協力いただいた皆様

成果発表会

国際教育振興会賛助会会長 藤崎一郎様
国際連合事務総長特別顧問 高須幸雄様
大阪市立大学大学院経済学研究科 齋藤幸平准教授

分科会活動

テーブル1

早稲田大学国際教養学部 ティモシー・スール教授（メンター）

テーブル2

ピースボート共同代表 川崎哲様（メンター）
ワシントン大学人類学部 ホリー・バーカー教授（メンター）
ピースボート 畠山澄子様（ゲストスピーカー）
ケン・ブラウネル様（ゲストスピーカー）
アッシュ・マリア様（ゲストスピーカー）

テーブル3

国際協力機構インド事務所 古山香織様
国際協力機構インド事務所 アヌラグ・シンハ様
特定非営利活動法人TABLE FOR TWO International 張一華様
デンマーク・オーフス大学人類学部 スザンヌ・ホイルン准教授
全国食品ロス削減研究所代表 原田佳子様
NPO法人e-ワーク愛媛代表　全国食品ロス削減研究会副代表 難波江任様
みた農園 三田善雄様
株式会社パン・アキモト専務取締役なんでも係 秋元信彦様

テーブル4

経済人コー円卓会議日本委員会事務局 岡田美穂様（最終成果物のお受入れ）
JCI産業文化協同組合 高橋孝彰様（メンター）
名古屋市立大学大学院人間文化研究科 奥田伸子教授（メンター）
東京都立大学人文科学研究科 丹野清斗教授（メンター）
ボイスインターナショナル株式会社様
インタビュー調査にご参加いただいた技能実習生

テーブル5

専修大学国際コミュニケーション学部 今井ハイデ准教授（メンター）
東京大学大学院工学系研究科博士課程 ジョーイリン・マーティ様（ゲストスピーカー）
Smart City Institute Japan様
parCitypatory.Org様
Placemaking X様

完全自律型兵器に関するグローバルユース会議
「キラーロボット反対キャンペーン」
国際人権NGOヒューマン・ライツ・ウォッチ 左元様
各国ユース代表者の皆様

第67回国際学生会議ワークショップ
CRR Global Japan 合同会社様

実行委員会定例会会場のご提供
A-LABO様

以上の方々を始め多くの方にご協力いただきました。
この場をお借りして心より御礼申し上げます。
皆様、誠にありがとうございました。

第67回国際学生会議 事業報告書

発行責任者：カンロンタム・ダムロンスントーンシャイ

編集責任者：カンロンタム・ダムロンスントーンシャイ

発行：第67回国際学生会議実行委員会

〒171-0033 東京都豊島区高田1-3-10 NFコーポ早稲田207

連絡先：japan.isc67@gmail.com

ISC

International Student Conference